

ている。今回の事件も民間人に対して発砲、死者を出したことは作戦として稚拙と指摘されているが、タカ派の強硬な世論に抗えず国際社会の反発は承知の上で今回の対応に踏み切ったとみられている（東京 6/4）。

以上、簡単に本件をまとめた上で、その背景として指摘されている点をレビューした。今回は封鎖の緩和をもって落とし所としたようであるが、問題は未解決であり、今年5月に再開した中東和平交渉に対しての影響は計り知れない。中東和平の鍵となる可能性があり、今後の動向も注視する必要があるだろう。

[文責：藤野陽平]

研究ノート

諏訪大社御柱祭に見る現代の祭礼とその報道

—地方紙記事の解説から—

碧海 寿広

はじめに

数え年で7年ごと、満6年に1度の間隔で行われる長野県諏訪地方の御柱祭が、4月から5月にかけて開催された。全国の諏訪大社の総本社、諏訪大社の祭礼で、奥山から切り出したモミの巨木計16本を、上社（諏訪市、茅野市）と下社（下諏訪町）合わせて4つある神社まで4本ずつ人力で運び、古い柱と建て替える行事だ。本稿は、この祭礼をめぐる発せられた新聞報道、特に、地方紙によるその内容紹介と若干の分析を試みるものである。

信濃国の一宮、諏訪大社における最大の行事、御柱祭。その現代的な特色を一言で総括すれば、祭礼の「資源化」の推進、ということに尽きるだろう。御柱祭は人を呼べる、という当該地域の自覚はおそらくこれまでにないほど高まっており、観光客の誘致を目的とした施策やプロジェクトの数々が、紙上で報道された。同地の住人が外部の来客を誘い入れようとする際に、御柱祭は最大限に活用すべき「資源」であるとみなされているのだ。

むろん、ツーリズム志向の強化というのは、現代の著名な祭礼に関してはおおよそではまる傾向であり、何も御柱祭に特別なことでは全くない。とはいえ、6年に1度という頻度的な希少さと、4月から5月の長いスパンにかけ地域をあげて祭を盛り立てる、という規模の雄大さゆえ、この祭礼1回をめぐる観察されるツーリズム関連情報の多彩さは顕著であり、そこに注目することには一定の意義があるだろう。

こうした外部の観光客を意識した「資源化」の実態とともに、本稿が触れるのは、地域の内部における祭礼の「資源化」の展開である。御柱祭は地域住民の絆を強める、という認識は当事者の多くに共有されており、当地の新聞もこうした心情を明確に追認した記事を掲載する。御柱

祭という「資源」を最大限に利用することで、地域住民の心理的な一体化を成し遂げたい。そのようなローカルな願いが、この祭礼に関する報道のなかではごく明瞭に表出されている。

むろん、皆で協力し合う祭の実行が当事者間の共同性の向上に寄与する、という現象は、従来の宗教学や社会学でも繰り返し論じられてきた、素朴な不易の真理だろう。だがこの問題についても、現代日本における屈指の巨大祭礼においてその実情はいかに表現されているのか、という視点から、改めて検討してみる意義はあると著者は考える。

そして、その「表現」の最たる主体としてあるのが、地方紙ないしは全国紙の地方版（以下、まとめて地方紙）というメディアである。知られているように、地方紙には全国紙では取り上げられないような地域情報が満載されており、そうした情報の代表格が、地域固有の祭や行事に関するものである。当該地域が誇るべき祭礼やイベントについて、地方紙というメディアはときにかなり高水準の分量と密度をそなえた情報を発するのだ。

これに匹敵するものとして例えば、地方局やケーブルテレビによる祭の中継番組があるだろう。だがそれらは、視聴者に向けたスペクタクルの放映といった面では確かに強力なメディアであるにせよ、祭礼に関するあらゆる事柄を綿密に取材しこれを言葉で丁寧に表現してくという、地方紙による仕事の細かさや情報量には及ぶところではない。

地方紙が特定の祭礼の詳細を報道するとはいかなることか。本稿の最大の目的は、この地方紙による祭礼報道がもつ意味を、具体的な記事内容の分析、ここでは特に、御柱祭に関してその徹底した情報媒体の役割を果たした、信濃毎日新聞と長野日報の2紙に掲載された記事に基づき考察することにある。

予めこの2誌の特色を述べておけば、前者の信濃毎日新聞は、シェアが県内トップを誇るメジャー新聞であり、他の様々な種類の記事との兼ね合いから、祭礼報道は実際の開催期間に集中する傾向があるのに対し、後者の長野日報は、諏訪市に本拠を置くまさに諏訪地域にとっての「The 地方紙」であり、地域の行政や暮らし、年中行事や祭を中心に扱う地域密着型の特性を活かして、祭礼報道も事前のものから期間中のものまで幅広く掲載している。御柱祭に対する報道姿勢もまた、両者で微妙に異なっている。ただし、本稿でこれから見ていくように、記事内容において重なりあう部分は決して少なくない。

以下、2010年に行われた御柱祭とその報道について、その開催までの準備期間から4月～5月の実施期間に見られた事象を概観しつつ、上記したいくつかの主題について論述していく。参考にした記事は、RIRC所蔵の記事ファイルに加え（*）、RIRC研究員の藤田庄市氏にご提供いただいた信濃毎日新聞の現物から適宜選出したものである。なお、引用した新聞の日付は、2010年以外のもので、発行年も記してある。

（*）RIRCの宗教記事データベースで検索したところ、「御柱祭」でヒットする件数は、2007年が33件、2008年が68件、2009年が149件、2010年の1月から5月までが583件で、このうち、信濃毎日新聞によるものがそれぞれ3件、8件、17件、128件、長野日報のものが14件、36件、99件、303件であった。

1. 前奏—長期の事前報道—

2007年5月12日、諏訪郡下諏訪町の東俣国有林で、御柱祭の下社仮見立てが行われた（中日・長野 2007/5/13ほか）。御柱の用材となる巨木の候補を選定する行事だが、御柱祭をめぐる報道はこれを端緒とし、以後約3年間にわたり、祭の本番を迎えるまでの事前報道が断続的

に発せられる。祭のサイクル自体が6年に1度という長さゆえ、その前段階の報道もまた長期に及ぶというわけだ。

約1年後の2008年5月11日、同じ下諏訪町の東俣国有林で下社本見立てが行われ、下社御柱祭の際に秋宮と春宮に各4本曳き建てられる御柱が正式に決まった（信濃毎日2008/5/12）。また同年9月19日には、上社仮見立てが北佐久郡立科町の蓼科山国有林で行われ、本宮一から前宮四までの8本の候補木が決定した（長野日報2008/9/20）。

これらのニュースは、信濃毎日新聞や長野日報では、1面に大きな写真付きで報道される。しかも後者の上社仮見立てについて報じた長野日報は、別のページを全面に使って行事の模様を伝える複数の写真を掲載し、御柱の候補木のもとに集った約800人の氏子たちの姿を鮮やかに写している。後に見るように、実際の祭の期間における地方紙の写真の使いぶりというのはもっと豪勢なものだが、されど、祭の前段階の、氏子のみが関与する行事に関しても相当に熱のこもった紹介をするのが、地域の巨大祭礼に対する地方紙のスタンスの取り方だ、という事実については、ここでまず確認しておきたい。

2009年5月3日、先に選定された下社の8本の御柱用材木の伐採が行われた（長野日報2009/5/4）。続けて同年6月19日には、上社の本見立てが実施され（長野日報2009/6/20）、そこで決定された本宮、前宮各4本の用材は翌2010年3月11日に伐採された（長野日報3/12）。当然、というべきか、このいずれの行事についても当該の新聞は1面に写真付きで大きく扱い、また別のページでも見立ての過程や用材伐採の様子を多くの写真を用いながら描写している。

3月20日、下社山出しの出発点となる諏訪群下諏訪町の棚木場（たなこば）で、27日には上社山出しの出発点となる茅野・原両市村境の網置場で、それぞれ御柱用材の木作り（切り出した用材を曳行用に整形する作業）が行われた（長野日報3/21、同3/28）。次いで28日、上社山出しで木落としの会場になる茅野市宮川の「木落とし公園」において、御柱が下る坂の傾斜部で鳥居の形に積み上げた干し草を燃やし、坂を焼き清める安全祈願祭が実施された（信濃毎日3/29）。かくして、祭のお膳立ては整った。

なお、以上のような祭の準備の要所以外にも、地方紙は、御柱祭に関する様々な記事を定期的に掲載している。例えば、御柱祭には欠くことのできない木遣（きやり）の保存会の活動紹介であり（長野日報2009/3/17）、祭の開催にあたって諏訪大社の鳥居にしめ縄が奉納される模様であり（長野日報2009/12/7）、あるいは用材の伐採に使用される斧やのこぎりを清める火入れ式の神事の一部始終である（長野日報3/8）。これらはほんの数例に過ぎないが、こうした綿密な報道姿勢からは、御柱祭にまつわる物事であればすべてを報道しておきたい、といった地方紙のもつ願望を、うかがい知ることができるだろう。

2. 宣伝—観光客の誘致—

祭礼の準備作業と並行して、地方紙では、御柱祭を呼び物にして多くの人々を現地に誘い出すためのプロジェクトの諸相に関する報道がある。以下、いくつか見てみよう。

2008年12月4日、諏訪大社は秋宮参集殿で大総代会を開き、御柱祭の日程を決めた。前回2004年の同祭に比べ約2ヶ月早い日取りの決定であった（長野日報2008/12/5）。観光客の誘致のために、じっくりと腰をすえて計画を立てる時間が必要とされたわけだ。

これを受け諏訪地方観光連盟は10日、御柱祭に向けた宣伝戦略に関する企画審査会を諏

訪市役所で開いた。同連盟は、御柱祭期間中は木落としを中心に観光客が集中してきたため、いかに観光客を分散させ、効果的に観光振興に結び付けるのかを課題としており、そこで、従来の「見るだけ」の御柱祭に「触る」「曳く」といった体験を採り入れるという方針を立てた（長野日報 2008/12/11）。翌2009年1月30日、同連盟は御柱祭の2009～2010年度のプロモーション活動実施計画案を了承した。御柱祭＝木落としというイメージが定着している中で、山出し、里曳き、建て御柱、さらに夏から秋にかけて開催される小宮祭などにも光を当て、「御柱祭の本質」への理解を求めることで年間を通して誘客を図ることを確認した（長野日報 2009/1/31）。

以上のような計画案の具体的な実現として、例えば、『御柱祭の本質』を理解してもらうためのPRチラシが作成され（長野日報 2009/3/11）、祭の公式ホームページがリニューアルされ（長野日報 2009/6/18）、あるいは、「体験」を重視するという方針ゆえ、上社・下社それぞれの模擬御柱と、実際に曳くことのできる体験用の3本を展示する「御柱体験ひろば」が2009年7月12日、諏訪市湖岸通りの工場跡地にオープンした（信濃毎日 2009/7/13）。また、前回の御柱祭で課題となった観光情報の一元化という問題に対処するため、御柱祭情報センター事務局が、同年4月1日、下諏訪町役場に初めて開設され、祭に関する情報発信、旅行商品の企画、各種問い合わせに関する総合窓口としての機能を担うこととなった（長野日報 2009/4/2）。

こうした一連の観光プロジェクトの進行の過程を逐一読者に発信する役目を担うのも、地方紙のオリジナルな働きであるといつてよい。多くの観光客の誘致というのは地域の観光連盟の念願であるとともに、地域住民の一般的な期待でもある。祭に関する出来事をすべからく報じるという使命感に、その種のローカルな期待が相乗して、こうした方面の記事も事細かに掲載していく地方紙の働きが成立しているといえるだろう。

3. 祝祭 I — 「見せる」祭へ—

4月の2日～4日に上社山出しが、9日～11日に下社山出しが行われた。それぞれ、長さ約17メートル、幹周り約3メートル、重さ約10トンの巨木を上社・下社の御柱置場から四つの神社への中継地点まで運び出す行事であり、御柱祭の前半を構成する部分である。御柱祭の最大の見せ場である「木落とし」をその一環として含むため、この祭礼が対外的な視線を意識しつつどう変化しているのかを検討するには適当な対象である。

山出し開催の前日、信濃毎日新聞は広告的な特集記事を掲載した。「山出し特集 御柱祭 御柱の担い手たち」なる題目を掲げ、各宮の御柱曳行を担当する人物たちをカラー写真入りで紹介。祭にかける各自の意気込みを語らせた（信濃毎日 4/1）。見開き2ページ分の紙面が、彼等の祭に対する熱意によって占拠されたかのような様相を呈した。

4月2日に山出しが始まると、期間中、信濃毎日新聞と長野日報の2誌は連日大きく紙面を割いてこのスペクタクルを報道した。その報道にはもちろん、多数の精彩に富んだ写真が惜しみなく活用された。

例えば4月4日の信濃毎日新聞では、「上社 華麗に豪快に」の大キャプションを掲げた特集で、1ページを全面に使って豪快な木落としの偉容や、木遣りを響かせる子どもたちの姿、観覧席でカメラを構える観客らの写真を載せた。続けて、見開き2ページをすべて使い、川越し（御柱を曳きながら川を越えていく場面）の全体模様を抜き取った写真を掲載した（信濃毎日 4/4）。後者は、川中を運ばれていく巨木、必死の曳き手たち、群がる観衆の山を遠望で1枚に収め

たもので、その拡大写真を新聞の見開き全面に載せることによって、当該の場面の迫力を読者に伝えようとしている。こうした贅沢な紙面の使いようは、地方紙による祭礼報道ならではのえらさだろう。

御柱祭と写真記事との相性のよさは、しかし今回、特に意識的な演出により高まっていたことは、注記しておくべきだろう。上社山出しの木落としの舞台となった「木落とし公園」は、2009年12月までに茅野市が坂の再整備を行い、坂の平均斜度は26度と従来と同じだが、長さが17メートルからほぼ倍の32メートルに伸ばされていた。これにより、公園の周りに民間や公的組織が多くの有料観覧席を配置し、スタジアムのような雰囲気を作り上げることが可能となった（信濃毎日4/3・夕）。

さらに、下社山出しの方の木落とし坂にもまた、「改良」が施されていた。最大斜度35度の坂が、長年にわたる木落としで土が削り取られ、近年では御柱が途中で止まってしまうケースも目立ったため、えぐれている部分に土を入れ、広範囲にササを植栽することで、柱が滑りやすいように加工したのである。御柱とともに坂を滑り降りた氏子衆によれば「これまでの倍のスピードが出た」とのことで、見物客からの拍手や歓声は鳴り止まなかった（長野日報4/10）。

御柱祭を「見せる」祭として高度化させるには何が必要か。それを考えた上での施策の一種が、以上のような坂の「改良」であることは見て取りやすいだろう。御柱祭は単に地元の氏子と住人のためだけの祭礼ではなく、それを見る観光客の嗜好や興奮も込みで成り立っている。そのような事情をごく自然な前提とし、より多くの観光客の来訪を待望しながら、御柱祭は少しずつだが確実な変化を遂げているのである。

外部の人々に祭を「見せる」ことの意識化は、しかし、観光客目当てのそれのみに収斂するものではない、と指摘すべきエピソードもある。春宮四を曳航した岡谷市湊地区は4月9日、下諏訪町の木落とし坂に「感謝 湊豪雨災害時にはお世話になりました」と書かれた横断幕を掲げた。同市が豪雨災害に見舞われた2006年夏、甚大な被害を受けた湊地区には大勢のボランティアが駆けつけてくれたが、混乱の中で謝意を伝え切れなかったという心残りがあった。全国に感謝の気持ちを届ける機会は御柱祭しかないと考え、当日早朝から御柱が登場する直前まで掲示し、眼下の大衆にメッセージを送った（長野日報4/10）。

御柱祭は全国の人々に「見られている」。だからこれを通して地域の特定の意思を外部に「見せる」ことができる。このような地域住民の心意が端的にあらわされた、それは印象的な一場面であっただろう。観光客の視線を自覚化した御柱祭の変容もまた、そうした「見られている」ことへの揺るぎない自信により可能になっているものと思われる。

4. 祝祭Ⅱ—地域の絆の物語—

山出しから約1ヶ月の後、5月の2日～4日に上社里曳き、8日～10日に下社里曳きが行われた。それぞれ、中継地点で安置されていた上社・下社の御柱を、各神社の門前町を通り神社まで運び入れ、境内の所定の場所に建てるまでの行事である。御柱祭の後半部であり、締めくくりである。

里曳き開催に先立ち、信濃毎日新聞は再び特集を組み広告記事を掲載。今度は「里曳き特集 御柱祭 里曳きを彩る人々」と題して、騎馬隊、木遣り衆、ラッパ隊、鼓笛隊、長持ちのグループなど、里曳きの運行を周囲で盛り上げ花を添える脇役たちを、彼らのカラー写真付きで紹介をした（信濃毎日4/30）。

5月2日に里曳きが始まると、信濃毎日新聞と長野日報はやはり連日、多くの写真を使いながら、祭礼のありとあらゆる場面を活写した。神社に向かい御柱を曳行する氏子たち、街道を埋め尽くす観光客の群れ、拡声器を使って応援の声を張り上げる子ども、里曳きに随行する騎馬行列、踊りや太鼓のパフォーマンス、小学生の鼓笛隊によるパレード、曳行の合間に曳き綱の周りで休憩をしている人々、そして、神社境内で御柱が徐々に立ち上がっていくプロセスと、最後に柱が垂直に立ち、建て御柱が完遂されるフィナーレの雄姿——この祭のすべてを目撃したと読者に錯覚させんばかりの無数の鮮明な写真が、大きく割り当てられた紙面の上にとりばめられている。

だが、里曳きの報道に関してこうしたスペクタクルの全様の表示とともに興味深いのは、御柱祭に参加する地域住民の「絆」の強化を語ることに熱心な地方紙の姿勢である。

上社里曳き2日目となる3日、前宮四を担当した茅野市豊平・玉川地区は、御柱につないだワイヤを巻き上げる道具「車地」を使わず、女性や子どもがロープを引いて柱を建てる珍しい方法を採用した。建て御柱は通常、経験豊富な建設会社や工務店に指揮を任せ、氏子は見守りだけのことが多いが、両地区は今回、皆で一緒に楽しもうと考え、700人以上が参加した。信濃毎日新聞ではこの建て御柱の模様を、「女性も子どもも力合わせ」「みんなで建てた」「思い出づくり 新方式」といった見出しを付与し、参加者たちの高揚感を示す写真とともに報じた(信濃毎日 5/4)。

下社里曳きの最終日である10日、秋宮境内では、建て御柱に向けた作業中の秋宮一が一時的に作業を止め、秋宮四の通過を見守る一幕があった。両地区の曳行責任者によればこれは初めての試みで、従来は秋宮一の建て御柱が終了するまで秋宮四は待機させられていたが、今回は予め両者で協力を申し合わせていた。長野日報はこの出来事を「柱の“根根”超え団結」という見出しのもとに伝えた(長野日報 5/11)。

さらに同紙の同ページには、「川岸悲願の『天端乗り』」「岡谷3地区が一致協力」との見出しを掲げ、岡谷市旧村部の川岸、湊、長地の3地区が、秋宮二の建て御柱で結束したことを報じた記事も載せられている。秋宮二を交代で曳行するこの3つの地区は、これまで、しんがりを務める長地を中心に柱を建てるのが通例であったが、今回の建て御柱では多くの役割を分担。柱の先端に乗る「天端乗り」は「史上初」となる川岸が担い、祭の達成感を3地区で共有したという(同前)。

地域の住民が、「みんな」で「団結」し「協力」しあって大きな祭を成功させる。現在の御柱祭の当事者たちは、こうした「地域の絆」の物語を様々な局面でつむぎだすためにも、従来にない新しいかたちのイベントや祭礼のスタイルを構想し、それを次々に実現にうつそうとしているようだ。また、その物語の創作に寄り添おうとする地方紙は、当事者たちの願いを読み取りながら、物語の媒介者としての役目をまっとうしようと試みている。地域が誇る巨大祭礼の式次第に対するマイクロな操作を通して、あるべき「地域の絆」の理想図が当事者間で共有され、そのイメージを地方紙というメディアが、やや遅れて肯定的に描き出しているというわけだ。

5. 暗転—死亡事故の衝撃—

下社里曳きの初日となった5月8日の午後5時ごろ、下諏訪町の下社春宮左片拝殿脇で行われていた春宮一の建て御柱で、柱に乗っていた男性3人が約15メートルの高さから落下した。うち2人は全身を強く打つなどして死亡。残る1人と柱の下にいた男性1人が軽傷を負った。

見物客からは悲鳴が上がり、絶叫と怒号が飛び交い、観光客であふれ返る道には救急車のサイレンが鳴り響くなど、周辺は一時騒然となった（東京・東京 5/9、信濃毎日 5/9ほか）。

12日、諏訪署や県警捜査一課などが境内での実地検分を行った。同署は、御柱を支えるワイヤが切れて柱が揺れた際、命綱を装着していなかった3人が落ちたとみている（信濃毎日 5/13）。ただし関係者によれば「固定用のワイヤやロープが1本切れただけでは柱は絶対に揺れない」とのこと（読売・長野 5/12）。事故原因は未だ不明である。

御柱祭では、過去にも死者や重傷者が出る事故が起きている。県警によると、1968年以降、前回2004年までの御柱祭の死者は計6人、重傷者は計31人。直近の死亡事故は1992年の下社山出しで、春宮一の木落としの際、唐突に滑り落ちた柱で頭を打った男性1人が死亡。建て御柱では1980年の上社で、ワイヤの異常で本宮一の御柱が倒れ、1人が死亡している（中日・長野 5/9）。

4月11日には、長野県千曲市の古大穴神社の「御柱祭」（御柱祭は、諏訪大社以外に長野県内や全国の関連神社でも行われる）で柱を立てている最中、柱が突然倒れ、周りにいた氏子の男性4人が巻き込まれる事故があり、うち1人が死亡、3人が重軽傷を負っていた（毎日・東京・夕 4/12）。この死傷事故については諏訪の関係者も大いに注意を払っており、例えば茅野署の雑踏警備本部と上社安全対策実行委員会が19日、神社境内での現地視察を行った際、千曲市の事故に触れながら、各柱の担当地区に安全対策の徹底を求めていた（長野日報 4/20）。にもかかわらず、悲劇は起こってしまったわけだ。

5月10日午後4時ごろ、下諏訪町の下社秋宮三の先頭には、氏子が乗る代わりに3本のおんべ（御幣）が立てられた。春宮一の死傷事故で御柱から落下した3人に見立てたもので、彼等の無念を晴らしたいとの氏子の要望を受け、秋宮三の曳行長がこの日の朝、立てることを決めた。なお、9日朝には下社春宮から曳行を始める前、約400人の役員全員で黙祷し、午前中はラッパの演奏を自粛していた（信濃毎日 5/11）。

一方、12日付の長野日報の記事は、命綱着用の義務が徹底されていなかった問題をクローズアップ。「氏子の総意でやるお祭り」である御柱祭では、伝統や技術が重視される場面では原則よりも個人の判断が優先されることが多いことを指摘しつつ、「祭りと安全をいかに両立するか…これからの祭りのありようが問われている」として、次回以降の事故防止という課題を確認した（長野日報 5/12）。

6. 総括—地方紙と祭礼報道—

諏訪市の山田勝文市長は21日、諏訪地方で4～5月にかけて開かれた御柱祭の総動員数（参加者と観客の合計）が192万5千人に達したことを明らかにした。2004年の前回に比べ13万9千人（7.8%）増えた。動員数の内訳は、上社山出しが50万9千人、下社山出しが53万6千人、上社里曳きが43万1千人、下社里曳きが44万9千人。首都圏向けPR活動や期間中の好天、高速道路の休日割引などがプラスに働いたとみられる（日経・長野経済 5/22）。

地方紙が、このような地域を代表するスケールの大きな祭礼を報道することは、いかなる意味を有しているのか。以下、本稿のまとめとして議論しておこう。

見てきたように、事前の準備的な行事の数々から観光プロジェクトの進行の過程、祭礼期間中のスペクタクルの諸相から加えてもちろん事故の発生まで、地方紙は御柱祭のいわば「全体」を事細かに報じ伝えるために、取材や執筆や紙面編成の精力を存分に注ぎ込む。しかも、御

柱祭を「資源」としたツーリズムの発達と地域の絆の強化という、現地の住民がよりよい将来を見越して抱く期待と念願を敏感に察知し、これに関連した記事を紙上に載せていくことにも積極的である。歴史的な過去の蓄積の厚い地域の祭礼の、未来への展望も含めた現在の「全体」を詳細に描写し、地元の読者にこれを提供すること。それが、地方紙が土地の著名な祭礼を報道することの、最も重要な意義であるといえるのではないだろうか。

むろん、ひと口に「地方紙」といっても、個々の新聞ごとに性格は微妙に異なっている。今回主に取り上げた信濃毎日新聞と長野日報の2紙についても、冒頭に述べたように、県内のメジャー紙である前者と、諏訪地方の「The 地方紙」である後者とは、報道のスタンスには明らかな相違がある。祭礼の「全体」の表現、という本稿の分析がより適切に当てはまるのは、もちろん、後者の新聞の方である。

とはいえ、前者の信濃毎日新聞にしても、御柱祭の様々な側面を報道しようと試みていることは疑いないわけであり、こうした巨大祭礼の「全体」を報じようとする意志というのが地方紙の特色として言えるのではないか、という上記した仮説を裏切るものではない。このような「全体」の描写という特技は、おそらく地域社会に根ざした組織的な報道体制を敷くことのできる地方紙にのみ可能な営為であって、個人で活動するジャーナリストにも、あるいは「資料」の収集にのみ明け暮れる民俗学者らにも、決してなしえない仕事であろう。そうした徹底した仕事の遂行ぶりからは、地方紙記者たちの意地と矜持が透けて見えてくる。

この様な地方紙が発する祭礼情報の豊穰さは、単に地元の読者に喜ばしい経験をもたらしてくれるだけでなく、研究者が特定の祭礼に関する情報を入手するときにも非常に役立つ。ある特定の祭礼に関して、行政サイドの動きから個々の参加者のエピソードまで多くの関係者に取材し、祭の全様を多彩な角度から報じる、という地方紙が発する情報が、祭礼研究の貴重な素材となりうることは確実である。

むろん、地方紙はそれが地域密着型であるほど地元の祭礼のネガティブな側面については言及しながら、また本稿でも見たように、祭礼にかかわる「物語」をかなり肯定的に描き出そうとする傾向がある。祭礼に関心のない、あるいは無用と思っている地元民の「声」はほとんど拾われず、当事者の中で生じる瑣末なトラブルやコンフリクトの数々にもあえて言及することは少ない。こうしたどこの祭礼にもつきまとう負の側面は、「ありのままの事実」を理解する必要のある研究者はもちろん知悉しておくべき事柄だが、その種の知見を地方紙による報道から得ることは極めて困難である。地方紙が発する情報のもつ限界の一例として、その研究資料としての大いなる可能性とともに注記しておきたい。

昨今の情報技術の革新等により、新聞社のビジネスモデルとしての破綻が論じられるなか、この危機の時代を生き残っていくために地方新聞社には何ができるか、という課題が全国各地で模索されている(畑仲哲雄『新聞再生—コミュニティからの挑戦』平凡社新書、2008年)。そうした状況下、地域の大きな祭礼に対して惜しげのない紙幅を費やし精力的な報道をなす、といった地方紙の特殊な役割についても、根本的な問い直しが迫られてくることだろう。その渦中において、祭礼をめぐる「全体」報道のシステムにはいかなる変化が生じてくるのか——紙媒体を通じた地域固有のミクロな情報の伝達にますます特化していくのか、そうではなく、インターネット等の新たな情報配信の媒体にその役割を大きく移譲していくのか、あるいは特に何も変わらないのか——非常に興味深い問題である。